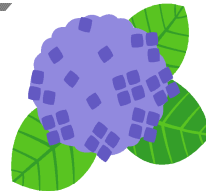


# 礼らいはいは 拝い

令和8年6月8日  
3号



## 親しき仲にも礼儀あり

～やさしい人になってほしい～

六月も二週目に入り、中間考査の結果などをもとに、個人面談が進められている真つ最中です。初めての定期考査に対する取り組みや、その成果をきちんと振り返り、今後の学校生活に生かしましょう。

さて、みなさんは「親しき仲にも礼儀あり」という言葉を聞いたことがありますか。どれだけ仲が良い友達や家族でも、相手への思いやりや礼儀を忘れて、自分の価値観や判断基準で勝手なことをすると、今までの良い関係が壊れてしまうという意味の言葉です。

この教訓は二千五百年以上前から伝えられており、「王様のひげを抜いた男く王親信禿諭（おうしんくつゆ）」という経典に見ることができ

きます。

『昔々、ある国に王様と、王様にとっても可愛がられている家来（けらい）の男がいました。王様は彼のことを心から信頼し、いつも自分のそばに置いて、他の人には言えない秘密の話もたくさん打ち明けていました。ある日、王様が「頭がかゆい」とつぶやきました。家来の男はすぐに気がついて、王様の頭を優しくなでたり、かゆいところを丁寧に掻いてあげました。王様はすっきりして大喜びし、「お前は本当に気が利くやつだ」と、男をさらに信頼するようになりました。ところが、ほめられた男は「王様は僕のこと大好きなんだ。僕たちには強いきずながある。だから、これからは何をしても怒られないぞ。」と、だんだん勘違いをしていきます。しばらく経ったある日のこと、王様がたくさん家来たちの前で、大事な会議をしていました。男はみんなに向かって「自分は王様とこんなに仲が良いんだ」と自慢したくなり、とんでもない行動に出ます。大勢の目の前で王様のあごに手を伸ばし、生えていたひげを一本、思いっきり引き抜いたのです。王様は痛みに顔をしかめ、激しい怒りに震えました。「お前は私に親しく仕え、頭をかいてくれたことはありがたく思っていた。しかし、それをいいことに調子に乗り、私の顔を傷つけ、みんなの前で恥

をかかせるとは何事だ！」王様はすぐに男を捕らえさせ、重い罰を与えて、二度と国へ戻れないように追い出してしまいました。』

男はなぜ、王様を怒らせてしまったのか。それは、「親しさ」に甘えて、相手への「敬意（リスペクト）」を忘れてしまったからです。王様が頭をかくのを許してくれたのは、男が自分を思いやってくれたからです。しかし男は、「これくらいやっても許されるだろう」と調子に乗り、王様のプライドや立場を傷つけるという、やっつてはいけない「一線」を越えてしまいました。

私たちの学校生活や日常の友達関係でも全く同じことが言えます。仲が良いからといって、相手が嫌がるあだ名で呼び続ける、親しいからといって貸したものを返さない、秘密をバラしたりする。「友達だから許してくれるはず」という油断や考えの甘きこそが、実は一番大切な人を傷つけ、友情を壊す原因になります。友達とは自分とは違う、一人の個性として考えなければなりません。相手とずっと良い関係でいたいからこそ、親しい友人との間でも、「ありがとう」や「ごめんなさい」を素直に言える「やさしい心」を持つことの大切さをあらためて考えてみましょう。